古語指導の一方法

稲村榮一

はじめに

高校生は「古文は英語よりも難しい」などと訴える。それは、例えば「助動詞『む』には推量・意志・希望・勧誘・命令・当然・可能・仮定・婉曲の用法がある」などと聞くと、古文のおもしろさに気づく前に敬遠してしまうのも一因であろう。そんな古文入門期の障害を何とかしたいと考え、実行したのが以下の方法である。

基本は、古語の語義・用法を理解しやすくするためにまず関係のある語はまとめて、その差異や特色を印象づけること。そして文法も「暗記物」でなく、合理的に理解し納得できるような説明を工夫すること。また語義は特殊な用例まではカバーできなくても、中古文の用例を中心に、基本となる本義を簡潔に押さえることで、文脈に応じた解釈力を目指すやり方である。

それらの中から多少なりとも独自な考えに基づく扱い方をした七例を挙げることとする。入門期の生徒を対象とした教育現場からの発想である。

一、対義的な推量助動詞の例（なり、めり）

「なり」と「めり」は意味が対照的な、ペアの推量助動詞と見る。

「なり」は物音を聞いての推量を表す。（聴覚推量）

「めり」は何かを見ての推量を表す。（視覚推量）

☆共に、終止形（ラ変は連体形）に接続する。

☆共にラ変型に活用する。

1　語源「音（ネ）あり」が「なり」となり、語源「見えあり」が「めり」となっただろうとする説に従って、端的に「なり」は聴覚による推量、「めり」は視覚による推量と見なして解釈すればよい、とするのである。

例えば「人来（ク）なり」は、人の話し声とか足音を聞いて「人ノ来ル物音ガ聞コエルヨウダ」とか「誰カ来ルヨウダ」と、物音で推量している意味である。

「人来（ク）めり」は、人の来るのを見ながら「人ガ来ルヨウニ見エル」とか「見タトコロ誰カ来ルヨウダ」とか、見て推量していると見る。

普通、この「なり」は「伝聞・推定」と呼ばれているが、「伝聞」はもちろん、「推定」とされる場合も聴覚に基づいている。「めり」の方も「様態の推量」や「婉曲な断定」を表すなどと、様々に呼ばれているが、視覚が関わっている点は共通している。そこで、前記を本義として認識しておく方が理解しやすいと考える。

2　「なり」（聞いての推量）の説明例

①男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。　（土佐日記）

（男モ書クト聞イテイル日記トイウモノヲ、女デアル私モ試ミヨウト思ッテ書クノデアル）

この「なり」は終止形に付くが、別に、連体形に付く「なり（断定助動詞）」もある。右文末の「するなり」がそれである。そこでもし、終止・連体同形の語（例、四段活用）に「なり」が付くと、推量か断定かの判別ができない。その場合は右の本義に従い「物音」の有無で判断してよいと見る。例えば次の②・④は「推量」で、終止形接続と見なし、③は「断定」で、連体形接続と見なすのである。

②夕されば野辺の秋風身にしみて　うづら鳴くなり
深草の里　藤原俊成（千載集）

（：ウズラガ鳴イテイルノモ聞コエテ来ルヨウダ）

③み吉野の山の白雪つもるらし　ふるさと寒く
なりまさるなり　坂上是則（古今集）

（：古里ハイッソウ寒サガ増スコトデアル）

④み吉野の山の秋風小夜ふけて　ふるさと寒く
衣打つなり　藤原雅経（新古今集）

（：古里ハ衣ヲ打ツ音モ寒々ト聞コエルヨウダ）

次の例は、明らかに終止形接続だから推量である。近所の出来事を、物音を聞いて推量しているのだと見る。

⑤（男は女を）呼びわづらひて、笛をいとをかしく吹き澄まして過ぎぬなり。　（更級日記）

（呼ンデモ女ノ返事ガナイノデ、男ハ笛ヲ上手ニ吹キ澄マシナガラ過ギ去ッタヨウニ聞コエル）

3　「めり」（見ての推量）の説明例

①子になり給ふべき人なんめり。　（竹取物語）

（私ノ子ニオ成リナサルベキ方デアルヨウニ見エル）

・（：デアルヨウニ見受ケラレル）

②竜田川紅葉乱れて流るめり　渡らば錦
なかや絶えなむ　よみ人知らず（古今集）

（竜田川ハ紅葉ガ乱レ散ッテ、川ガサナガラ錦ノ織物ノヨウニ見エル。ソコヲ歩イテ渡ッタナラ：）

③もののあはれは秋こそまされと、人ごとに言ふめれど：　（徒然草）

（物ノ趣ハ秋ガ最モ勝ッテイルト誰シモ言ウヨウニ見エルガ：）

4　推量助動詞は終止形接続が原則である。

「雨が降る。」と一度言い切った語句に、推量語「だろう」を添えると推量文ができる事からわかるように、「推量の助動詞は終止形接続が原則である」と見ておく

とよい。終止形以外に付く推量助動詞（む・じ・まし・けむ）もあるが、それには別の事情がある。

終止形接続の語にはすべて「ただしラ変には連体形に付く」と但し書きが付いている。その理由は、ラ変以外の動詞の終止形語尾はすべてウ段音で終わるから、それに接続しなれた語は、ラ変に付く時も、ウ段音を求めて連体形に付くのだとみなせばよい。

5　「なり」が重なって「なるなり」とあった場合は、上の「なり」が断定、下の「なり」が推量と見てよい。根拠は「なるめり」と同じ構成と見るからである。

その場合、共に音便化して「なンなり・なンめり」となるのが普通で、表記は「ななり・なめり」となっていても、読む時は「ン」を補って読んでいる。

同じ現象は「なり」・「めり」の上に「あり」が来た時も「あンなり」・「あンめり」と言う形で起こるが、これも「なり・めり」の共通性に関わるのであろう。

二、類義的な推量助動詞の例（む、べし）

「む」・「べし」はほぼ同じ意味を表すと見なせるので類義的な推量助動詞と見る。

他の推量助動詞が狭い意味を守備範囲としているのに比べて、「む」・「べし」だけは多くの意味を守備範囲とするため複雑多様な印象がある。そこで意味構造を簡明に概念図化した試みが次である。

その多様な意味を、「誰の動作に付くか」を基準として次の三系列に整理する。解釈の際にはその系列内で適訳を探す。実際には微妙な用例も多く、明快な判断の困難な場合もあるが、こうした意味構造を念頭において考えれば解釈の手掛かりを得やすいだろうと思う。

①第一系列：自分の意思的動作に付いている場合は意志または願望の意味を表す。

ただし自分の動作でも、自分の意思の及ばない客体化された自分であれば第三系列となる（注1の例参照）。

◎「我行かむ」

私ハ行コウ（意志）・私ハ行キタイ（願望）

◎「我行くべし」

私ハ行コウ（意志）・私ハ行キタイ（願望）

②第二系列：相手の動作に付いている場合は、勧誘・適当・当然・命令などの意味を表す。

これは相手への押し付けがましさの強弱による違いで、弱から強へと並べたが、決定的な差異は乏しい（注2の例参照）。

◎「君行かむ」

君ハ行カナイカ（勧誘）・君ハ行クガヨイ（適当）・君ハ行クベキダ（当然）

◎「君行くべし」

君ハ行クガヨイ（適当）・君ハ行クベキダ（当然）・君ハ行ケ（命令）

③第三系列：第三者（事物を含む）の動作に付いている場合は推量か可能推量の意味を表す。ただし「事物」であっても、それを擬人化して呼びかければ第二系列となる。

◎「彼行かむ」
彼ハ行クダロウ（推量）・彼ハ行ケルダロウ（可能推量）

◎「彼行くべし」
彼ハ行クダロウ（推量）・彼ハ行ケルダロウ（可能推量）

☆「む」は未然形に接続し、「べし」は終止形（ラ変には連体形）に接続する。

☆「む」は四段活用型に活用し、「べし」は形容詞型に活用する。

注1：旧りたる君に此処にあはむとは　（万葉集）
（老イタアナタニ、コンナ所デ会ウダロウトハ）
暗きより暗き道にぞ入りぬべき　はるかに照らせ山の端の月　和泉式部（拾遺集）
（私ハ暗イコノ世カラ、更ニ暗イ冥途ニ入ルコトニキットナルダロウ。ソノ時ハ：）

注2：「剣太刀いよよ研ぐべし」（万葉集）で言えば、「イッソウ研グガヨイ（適当）」、「イッソウ研グベキダ（当然）」、「イッソウ研ゲ（命令）」と、系列内で徐々に訳を強めて見ることができよう。

1　いわゆる「婉曲用法」について

右の三系列の意味と並べて「婉曲・義務・仮定・予定・条件」（まとめて以下「婉曲」と呼ぶ）などを列挙するのが一般である。しかしこれらはすべて連体形にのみ見られる用法であり、次のように解すべきだと考える。

「心あらむ人に見せばや：」の「む」は「推量」である。これを「心アルデアロウ人ニ見セタイ」と訳すならば非現代語的に聞こえる。下に名詞が来るためである。そこで「心アルヨウナ（婉曲）人ニ見セタイ」と訳す。また「舟に乗るべき所へわたる」の「べき」は「意志」であろうが、これを「舟ニ乗ロウト思ウ所ヘ行ク」と訳すのは回りくどい言い方と言えようか。そこで「舟ニ乗ルハズノ（予定）所ヘ行ク」などと訳したりする。

すなわち連体形を名詞に続ける形で訳すのは、現代語では滑らかにいかない場合が多い。そこで、意を汲んで「：ヨウナ（婉曲）：シナケレバナラナイ（義務）：トシタラ（仮定）：スルハズノ（予定）：ナラバ（条件）」などと訳すことを一括して「婉曲」と見る。

こう考えると「心あらむ人」の「む」は、「推量か婉曲か」と区別する必要はなくて、「推量用法であるが、連体形だから婉曲に訳す」と考えるのが合理的と思う。そのことは次の例を見ても理解できよう。

明けばまた越ゆべき山の峰なれや　空行く月の末の白雲　藤原家隆（新古今集）

「越ゆ」は自分の動作だから「べき」は「意志」が基本と見て「越エヨウト思ウ山」であろうが、連体形だから「越エルハズノ（予定）山」とか、「越エネバナラナイ（義務）山」とも訳せよう。しかし「当然」と解するのは第二系列の「相手」の動作を言うようでよくない。

付言すれば、この「婉曲」問題が起こるのは、現代語が「…であろう人は」のような、推量に体言を続ける表現を一般に用いないことに由来すると思う。端的に言えば「む・べし」の連体形に相当する現代語が乏しいからであろう。それをあえて訳そうとする時に「婉曲」が必要となるのだから、柔軟に対応してよいと思う。

「婉曲」の訳は、「む」を含む「らむ（現在推量）」や「けむ（過去推量）」の連体形でも同様に起こる。

2　「む」と「べし」の類義性と対照性

「む」・「べし」は極めてよく似た意味を持つが、それを関連づけた説明は一般に行われていない。例えば多くの文法教科書では、「む」の意味に推量・意志・勧誘・適当・当然・仮定・婉曲等を挙げ、「べし」には推量・当然・可能・意志・命令・適当・勧誘・義務などよく似た意味を掲げているが、両者を関係づける説明は見られない。しかし学習者の立場からすれば、類義的な両語がどういう関係にあるかは気になる所であろう。

まず両語の関係の深さを考えて見ると、

①前に示したように、意味構造がほぼ同じだと見なせる共通性があり、類義語と見ることが出来る。

②「む」は「じ」、「べし」は「まじ」という否定語をペアとして備えている。他の語にない特長である。

③「完了」の「つ・ぬ」は「む・べし」に接した時には「てむ・なむ・つべし・ぬべし」となって、完了ではなく「強意」に変化する。これは他の推量助動詞にはない、「む・べし」だけの現象である。この「強意」とは、完了してもいないのに、あたかも完了したかのように確実だと推量するもので、「キット…ダロウ」「…ニ違イナカロウ」「今ニモ…シソウダ」などと訳している。この現象も両語の類似を示していよう。

こうした点から「む」・「べし」には強い相関があり、並べて整理するのが好都合であろうと考える。

一方、両語には対照性もある。

極めてよく似た意味ではあるが、その多様な意味を総合的に見ると『む』は柔らかい推量、『べし』は強い推量」と言えそうである。「む」が和文的・女性的・上品などの響きがあるのに対して、「べし」は漢文訓読的・男性的・強制的な響きがあるからである。例えば「べし」の「意志」は「決意」とも言えそうな強い「意志」であり、第二系列も相手への強制感が強い。第三系列の「推量」も確信的推量であろう。この対照性が、類義的な両語が存在し続ける理由の一つであるかも知れない。

3　「む」・「べし」の説明例

①昔、男、…東の方に住むべき所求めむとて行きけり。　（伊勢物語）

（∵住メソウナ所ヲ求メヨウト思ッテ出カケタ
ソウダ）　　＜可能の連体形・意志＞
②鳴り高し。鳴り止まむ。はなはだひざう（非常）
なり。　　（源氏物語　乙女）
（騒々シイ。静カニスルガヨイ。タイソウケシカ
ラン）　　＜適当か当然＞
③定めて習ひあることに侍らむ。ちと承らばや。
（徒然草）
（定メシ、イワレノアルコトデゴザイマショウ。
チョット承リタイモノデス）　　＜推量＞
④年五十になるまで上手に至らざらむ芸をば
捨つべきなり。　　（徒然草）
（五十歳ニナルマデ稽古シテモ名手ニナレナイヨウ
ナ芸ハ捨テルノガヨイモノダ）
＜推量の連体形・適当の連体形＞

三、過去助動詞（き・けり）の「意味」の違い

「き」と「けり」は「過去助動詞」と呼ばれるが、その表す意味は大きく異なる。

「き」は「確実にあったと思う過去」を表し、その例の多くは、語り手の直接経験した過去を言う。

「けり」は、見たり聞いたり体験したりなどして、「今わかったこと」を表す。

☆「き・けり」は用言から出来た語かと思われるので、「連用形に付くのが原則である」と見ておくとよい。ただし「き」には一部変則的接続もある。

☆「き」は、カ・サ行にわたる特殊活用をし、「けり」はラ変型活用をする。

1　「き」の意味

「き」は「確実にあったと思う過去」を表す助動詞。『古事記』が神話・伝説さえも「き」を用いて語るのは「疑いのない事実」を語る歴史書の意識であろうか。しかし一般に「直接経験の過去」とも呼ばれているように、語り手自身の「過去の記憶」をいう場合が多い。

例：「京より下りしとき、みな人子どもなかりき」
（土佐日記）
（京カラ土佐ニ下ッタ時ハ、誰モ子ドモヲ連レテハ
イナカッタ）

2　「けり」の意味

「けり」は「過去・伝聞・回想・詠嘆」などと説明するのが普通であるが、自分が今見聞きして分かったことはもちろん、人から聞いたり、また書物で読んだりして「今わかったこと」を表すと見なす方が適切であろう。

過去にあった事実であろうと、今さっきの出来事であろうと、その事柄に今気づいたとか、今認識したとか、要するに「今わかったこと」を表すと見るのである。

例：出雲の国の肥の河上なる鳥髪の地に降りましき。
この折しも箸その河より流れ下りき。ここに須佐

之男命、その河上に人有りけりと思ほして、まぎのぼりいでまししかば：　（古事記）

地の文は「確実な事実」として「き」を用いて語るが、箸が流れて来たという事実に気づいた気持は「けり」を用いて「コノ河上ニ、人ガ住ンデイルノダ！」と言っている。次も、

例：二十五日の夜、宵うち過ぎてののしる。火の事なりけり。　（蜻蛉日記）

みんなが騒いでいるが、それは「火事ダッタノダ！」と知った場面である。以下、原義的に見て同じである。

例：見渡せば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける　素性法師（古今集）

見渡して見て初めて、なんと都は「春ノ錦ノ織物ノヨウダナア」と気づいたのである。

これらは「今わかったこと」として、程度の差こそあれ、驚き（詠嘆）を伴い易いものである。だから「伝聞・回想・詠嘆」などに分別することは本来困難なことだと考えるべきであろう。

例えば「昔、男ありけり」にしても、誰かから今「伝聞」して「昔、アル男ガイタソウダ」と語ったと見るのが本義であろうが、「過去・回想・伝聞」また「軽い詠嘆」など多くの要素を含んでいると考えられる。

3　「き・けり」の説明例

①年たけてまた越ゆべしと思ひきや　命なりけり小夜の中山　西　行（新古今集）

西行が、年高くなって再び小夜の中山（東海道の、曲折や深谷のある長い峠）を越えることになった時の歌である。「思ひきや」は、昔ここを越えた時、再び越えることがあろうなどと「思イモカケナカッタ」と「直接経験の過去」を回想した言い方。「命なりけり」は「ナント長生キシタモノダナア」と、今、回想して詠嘆している言い方である。その点は次も同じであろう。

②宿りして春の山辺に寝たる夜は　夢のうちにも花ぞ散りける　紀　貫之（古今集）

夢から覚めた時、あっと気づいて詠んだ歌と見てよい。「：何ト夢ノ中デサエモ花ガ散ッテイタナア」というのである。それは「回想」とも「詠嘆」とも言えるもので、一方だけには限定できないであろう。

四、接続理解の便法の例（る・らる、す・さす）

「る・らる」・「す・さす」の接続は一般に、「る」と「す」は四段・ナ変・ラ変の未然形に付き、「らる」と「さす」はその他の未然形に付くと言う。それを次のように考えておくと簡便であろう。

①「る」はア段音で終わる未然形に接続する。
　ア段音でない未然形には、自前でア段音を持つ「らる」が接続する。

②「す」もア段音で終わる未然形に接続する。
　ア段音でない未然形には、自前でア段音を持つ「さす」が接続する。

☆「す・さす」と同類の語には「しむ」もあるが、右と異なり、すべての未然形に接続することが出来るので、漢文訓読文体では、主にこれ一語ですますことが多い。
☆「る・らる」の意味は、受身・可能・自発・尊敬の四種である。
☆「す・さす・しむ」の意味は、使役・尊敬（実は敬意の強め）の二種である。
☆「る・らる」・「す・さす・しむ」はすべて下二段型の活用をする。

1　右の接続理解の便宜性

前記のように理解しておくと、簡単で、しかも誤解を防げよう。即ち「る」と「す」は必ずア段音で終わる語にしか付かないし、一方「らる」と「さす」はア段音で終わる語には決して付かないと見ればよいからである。例えば、次の文の品詞分解を誤って、

「（帝が桐壺更衣に）わりなく・まつは・させ・たまふ・あまりに：」（源氏物語）と考える恐れもあろう。しかし「させ」はア段音には付かないから「まつはさ・せ・たまふ」と改めて、「ムヤミニオ側ニ、マツワリツカセ・ナサル・アマリニ：」の意と判断できよう。

上接語が「四段・ナ変・ラ変」か否かを検討して判別するよりも簡単な弁別法ということである。

2　「す・さす・しむ」の「尊敬」とは。

「す・さす・しむ」には、「使役」のほかに「尊敬」の意味があるとされるが、「尊敬」は、「給ふ」などの尊敬語と共に用いた場合に限った意味である。例えば、「せ・給ふ」「させ・給ふ」「しめ・給ふ」などの形である。ただし逆に、その形がすべて尊敬になるわけではなく、「御馬を歩ま・せ・たまふ」の「せ」は「使役」と見ないと意味が不合理になる。

さらに、普通は一語の謙譲語として扱われている「参らす」「奉らす」「聞こえさす」などの語尾も本来同一語であろうから、「す・さす・しむ」自体に「尊敬」の意味があるというよりも、「他の敬語（尊敬・謙譲）に付いて、敬意を強める働きがある」と見て置く方が納得しやすい。貴人は人を「使役」して事を行うものだから、「使役」が「敬意」を強めるのであろう。

3　「る・らる」、「す・さす」の説明例

（　）内に二つの意味を記したのは文脈次第で変わるという用例で、全文を見て決めることになる。

①舅（シュウト）に褒められる婿。　（受身）
②箏（ソウ）の琴かき鳴らされたる。（自発か尊敬）
③頭の弁の参らるるを待ち侍るなり。　（尊敬）
④つゆまどろまれず、　（可能）
　明かしかねさせたまふ。　（尊敬）
⑤なほこそ国の方は見やられ。　（自発）
⑥歩み疾（ト）うする馬をもちて走らせ、　（使役）
　迎へさせたまふ時に：（使役か尊敬）

⑦御鏡を持たせ　（使役）
　させ給ひて御覧ずれば…　（尊敬）

五、「疑問」（や・か）の意味の扱い

「や」と「か」の意味は「疑問」が原則であるが、「疑問」を極度に強めて、いかにも疑わしそうに言うと「反語」になる。

逆に「疑問」を極度に弱めると「詠嘆」になる。即ち三つの意味は［反語↑疑問↓詠嘆］が連接状態にあるものであり、どちらとも決めかねる場合もあることを考えて解釈する必要がある。文型はほぼ同じである。

☆ほぼ同じ文型で三つの意味が表せるのは、現代文・漢文でも同じという共通性がある。

☆「や」と「か」は同義の二語といってよかろうが、その用い場所等に違いがある。

☆「や」・「か」には、係結を作る「係助詞」と、文末に用いる「終助詞」があるが、意味は共通しているので、今は区別しない。

☆反語とは、「そんな事があろうか（いや、あるはずもない）」のように、肯定文を強い否定文に変える文型。また逆に、否定文を強い肯定文に変える文型を言う。

☆「や」・「か」に助詞「は」が付き「やは」・「かは」となると、ほとんどが「反語」になる。「人は知っていても、私は知らない」のように、「は」はそれが付いた語を特に取り出して強める働きがあるから、「や・か」の「疑問」を強めるためである。

1　三義は連接していること。

例えば「そうですか？（疑問）」を強めると、「ほんとにそうですか？違うでしょう？（反語）」となろう。逆に弱めると「ああ、そうですか！（詠嘆）」となってしまう。同形の語句でありながら、疑問の度合いの強弱で変化するということは、同時に、どちらとも判断しかねる場合もあるから注意が必要である。

　漬物桶に塩ふれと母は産んだか　尾崎放哉

放哉が、寺男の身分になった自分の境涯を詠んだ句とされる。おそらく「反語」的に「そうではなかった筈だ」という気持であろうが、疑問あるいは詠嘆の含みもありそうで、考えさせられる例であろう。

2　「や」・「か」の説明例

①都鳥、わが思ふ人はありや、なしやと（伊勢物語）
（都鳥ヨ、都ニイルアノ人ハ無事デイルノカ、イナイノカ、教エテホシイ）　（疑問）

②君や来し我や行きけむ思ほえず　夢か現か
寝てか覚めてか　（伊勢物語）
（オ逢イシタノハ、アナタガ来タノカ、私ガ行ッタノカ思イダセナイ。アレハ夢ナノカ、現ナノカ、

寝テイタノカ、覚メテイタノカ）（疑問）

③近き火などに逃ぐる人は、「しばし」とや言ふ。（徒然草）

（近火ナドデ逃ゲ出ス人ガ、「火ヨ、シバラク待ッテクレ」ト言ウコトガアロウカ）（反語）

④生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。（古今集序）

（オヨソ生キテイル者ナラ、誰ガ歌ヲ詠マナイコトガアッタロウカ）（反語）

⑤日ごろは何とも覚えぬ鎧が、今日は重うなったるぞや。（平家物語。木曽義仲の最期）

（イツモハ何トモ思ワレナイ鎧ガ、今日ハ重クナッテイル気ガスルナア）（詠嘆）

⑥八十島（ヤソシマ）過ぎて別れか行かむ（万葉集）

（島々ヲ過ギテ都ト別レテ行クコトカナア）（詠嘆）

⑦（豪邸を建てても）さてもやは長らへ住むべき。（徒然草）

（豪邸同様ニ人ハ、生キ長ラエテ住ミ続ケルコトガ出来ヨウカ）（反語）

⑧命は人を待つものかは。（徒然草）

（死期ハ人ノ都合ナンカ待ッテクレヨウカ）（反語）

六、同根の動詞・形容詞の例（ながむ、ながし）

「ながむ（眺む・詠む）」を「長し」と同根の動詞と仮定して扱う例である。すなわち、

「ながむ」は形容詞「長し」の動詞化した「長む」と仮定して「長くする」を原義と見るが、具体的には「長々と息を吐く」意味に用いると見る。

それには二つの場合があって、

ア、詩歌を吟詠する場合。

詩歌会、口頭による和歌の贈答、平曲や歌謡、あるいは詩吟等々、謡い物は皆長々と声を引いて歌うのが常であったようだから、辞書に掲げる「詠む」と表記される「ながむ（吟詠する）」も、原義的には「長く息を吐く」ではなかろうかと推測する。

イ、ため息をつく場合。

「長々と息を吐く」もう一つは「ため息」であろう。多くは恋のため息である。その時の「ながむ」は意味の幅が広く、「ため息をつく→物思いに沈んでいる→ぼんやりと外を眺めやっている」など一連の状態を含んでいると思われる。解釈する時はそのどこかに重点を置いて見ることが出来る。

1　「ながむ」の原義

「眺む」は、和歌の頻出用語であり、「長雨」ないし「長目・長眼」が語源であると一般に説かれている。和歌で「ながむ」とよむ時は雨の情景が多いから、語源は「長雨」であると考えやすいのであろう。たしかに当時は雨具が不完全で、車には雨皮を覆う面倒さがあり、

徒歩だと無粋な蓑笠姿となるから、雨の日の外出は避けがちで、逢う事もままならなかった。

『伊勢物語』（百七段）にも、雨が降るので行けないといったんは言い送った男が、女の「数々に思ひ思はず問ひがたみ身をしる雨は降りぞまされる」という歌を見て、「蓑も笠もとりあへで、しとどに濡れて惑ひ来にけり」と述べ、雨が逢瀬を妨げた事情を語っている。

ところが「長雨」を約めた「ながめ」という別の語もあって、それを「眺め」と掛詞に用いる例がある。

「つれづれのながめにまさる涙川：」（伊勢物語）

など多い。もし「眺め」の語源も「長雨」ならば、こうした同語源の掛詞は成立しないと思う。

だから「長雨」は「ながむ」状態を招きやすい機縁ではあっても、「ながむ」の持つ「物思いに沈んでぼんやりと見やる」というのは「ため息」を原義とする意味と思えるのである。それを示唆する語に「嘆き」もある。「長息」の約まった「嘆き」は「ため息・嘆息」など、「眺め」と基本的に同義のようで、古くは「ため息」を「長息」と呼んだとも察せられる。こうした「ため息」を「ながむ」の原義と見ることで、前記のように解釈にかなりの幅を持たせて対応できよう。

2　同根の動詞・形容詞は他にも多い。

「長し・長む」のような同根の用言には「行く・ゆかし」、「たく・高し」、「ふく・深し」、「包む・つつまし」など多くあり、並べると指導しやすい。

3　「ながむ」の説明例

①花の色は移りにけりな　いたづらにわが身世にふるながめせしまに　小野小町（古今集）

「ながめ」は「長雨」と「眺め」の掛詞。

（花ノ色ナラヌ私ノ容色ハ早クモアセテシマッタコトダナア。空シイコトニ、降リツヅク長雨ノヨウニ、我ガ身ノ尽キナイ物思イニ明ケ暮レテイタウチニ）

②思ひあまりそなたの空をながむれば　霞を分けて春雨ぞ降る　藤原俊成（新古今集）

（恋シイ思イニ耐エカネテ、ソノ人ノ住ムカナタヲボンヤリ眺メテイルト、アタリノ霞ヲ分ケテ春雨ガ降ルコトヨ）

③花は散りその色となくながむれば　むなしき空に春雨ぞ降る　式子内親王（新古今集）

前のとよく似た歌であるが、「春歌」の部にある。しかし「ながむれば」とあることで、忍ぶ恋とも言えそうな情調が感じられるようである。

（花ハモウ散ッテイルガ、他ニ何ノアテモナイママボンヤリ外ヲ眺メテイルト、ホントニ何モナイ空カラ春雨ダケガ降ッテイル）

④面影を心にこめてながむれば　忍びがたくも澄める月かな　建礼門院右京大夫（同　集）

（アノ人ノ面影ヲ心ニ抱イテ物思イニ沈ンデイルト、コラエキレナクナルホド澄ンデイル月ダナア）

この作者は、平資盛と契りはしたものの、やがて資

盛は本妻を迎え、更には都落ちして西海に沈むという悲恋の中で歌を詠み続けただけに「ながめ暮らす」歌が非常に多い。しかし「雨」のために来られない人を待つのではなく、しょせんは手の届かない雲の上人を慕う恋であるためか、常に「ながめ」るのは「月や星空」であって、雨ではない。

⑤つくづくとながめ過ぐして星あひの空をかはらずまたながめつる　　同　前

（シミジミト長ク七夕ノ星空ヲ眺メ過ゴシタノニ、マタイツマデモボンヤリ眺メテイタコトヨ）

七、対義語の用言の例（こまかなり、おろかなり）

「こまか・こまやか」と「おろか・おろそか」は、共に多様な意味を持つが、次のように総括できる対義語と見ておくと理解しやすい。

☆「こまかなり・こまやかなり」は同じ意味の語で、原義的には「物の密度が密である状態」を言う。

それが文脈次第で「微細だ・繊細だ・親密だ・きめこまやかだ・念入りだ・行き届いている・ねんごろだ・色が濃い」などの状態を意味する。

☆「おろかなり・おろそかなり」も同じ意味の語で、原義的には「物の密度が疎である状態」を言う。

それが文脈次第で「粗末だ・粗略だ・なおざりだ・いいかげんだ・ばらばらだ・認識不足だ・愚かだ・親しくない」などの状態を意味する。

1　「こまか・こまやか」の説明例

①こまかにとぶらはせたまふ。　　（源氏物語）

（親切ニシバシバ訪問ナサル）

②異腹にてこまやかになどしもあらぬ人。　　（蜻蛉日記）

（腹違イノ兄弟デアッテ、親シクモシテイナイ人）

③墨染の色こまやかにて…。　　（源氏物語）

（墨染ノ衣ノ色ハ濃クテ…）

④いとをかしき様のみまされば、こまやかに笑ひて…　　（源氏物語）

（マコトニ風情アル振舞ガヨク見ラレルノデ、ニッコリト笑イナガラ御覧ニナッテ…）

⑤顔のうち赤み給へるなど、こまかにをかしうこそ侍りしか。　　（紫式部日記）

（顔ガホンノリ赤ランデイラッシャル所ナド、キメ細ヤカデオ美シイコトデゴザイマシタ）

⑥御返り事もこまやかにいとあはれに書きて…　　（十六夜日記）

（ゴ返事モコマゴマト綿密ニ心ヲコメテ書イテ…）

2　「おろか・おろそか」の説明例

①わづかに二つの矢、師の前にてひとつをおろかにせむと思はむや。　　（徒然草）

（タッタ二本ノ矢ナノニ、師匠ノ目ノ前デソノ一本

ヲイイカゲンナ気持デ射ヨウト思オウカ。

②言ふもおろかにめでたし。　（栄花物語）

（言葉デドウ言ッテミテモ不十分ナホドニスバラシイ＝言葉デハ言エナイホドスバラシイ）

③公の奉り物はおろそかなるをもてよしとす。　（徒然草）

（天子ノオ召物ハ粗略ナ物ヲモッテヨシトスルノダ）

④前生の運おろそかにして、身に過ぎたる利生に預からず。　（宇治拾遺物語）

（前世ノ運ガツタナカッタノデ、仏カラ身ニアマル御利益ヲ頂クコトモナイ）

おわりに

古文入門期に特に注意深く扱う語を、約三百語と考えている。諸賢の説を参考にしながら、それらを対義語・類義語・接続形式など何らかの意味で関連を持っていそうな数語をまとめ、比較対照することで差異を原義に求めたり、接続の音韻に留意したりして、古語の面白さに気づかせたい目標があった。

入門期には出来るだけ単純明快な形で文法を理解させたいし、意味も、細分化よりも基本的原義に留意して理解させたいと考え、少数の語ではあるが納得できる理解を目指した方法である。それが言葉自体への興味につながれば本望であった。

（元島根県立松江南高等学校校長）